「飯舘村の母ちゃんたち」通信 No１９

２０２３年5月発行

これからは自主上映です！　是非企画してください

岡戸　良子（映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会代表）

映画「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」は、去る 3 月 11 日ポレポレ東中野から劇場公開が始まり、関西方面は、神戸、京都、大阪、名古屋、そして福島で上映することが出来ました。この二作目も、皆様からの募金で完成した映画です。ご支援くださった皆さまには、心からお礼を申し上げます。
映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会は、2013 年 10 月に発足し、ジャーナリストでもある古居みずえ氏のカメラを通して、2011 年 3 月 11 日に起きたこと、そしてその後の福島・飯舘村の原発被災の真の事実を記録として将来に残すことを使命として活動してきました。第一作目の映画「飯舘村の母ちゃん土とともに」は、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染で全村避難のため故郷を追われ、仮設住宅で暮らす母ちゃんの生活が描かれています。困難な状況の中でも自然の恵みと共に帰村に向けて希望を持ち続けていたお母ちゃん達が主役でした。
そのお母ちゃんのお一人でいらした菅野榮子さんは、残念にもこの２月に天に召されました。わたくしは、この１月に菅野さんと最後に交わした会話の中で､｢帰村しても高齢者が一人で生きることは難しいね｣ と話されたことを思い出します。2017 年 3 月に避難指示が解除されたものの、若者や子どもたちは村に戻らず、帰村率が 2 割という厳しい村の現実がすべてを物語ると思います。
そしてこの二作目の「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」は、畜産、酪農に携わってきた３人のお母ちゃん達とその家族の 12 年を追ったドキュメンタリーとなります。苦悩のなかでも家族愛とともに人間力を発揮して生きていこうと将来に向けて、それぞれの選択をします。東京での劇場公開の際は、主役のお母ちゃん三人のうちのお二人、中島信子さん、長谷川花子さんが舞台挨拶のために上京されました。お二人とも強い飯舘村愛を語られると同時に、原発事故の放射能汚染により全てを失った事実を忘れないで欲しいとも語られていました。長谷川花子さんは、夫の健一さんを甲状腺ガンで昨年亡くされました。健一さんは、飯舘村前田区長として住民避難を先導し東京電力に損害賠償を求めて「原発被害糾弾飯舘村村民申立団」団長等として活躍されていた方です。花子さんは、原発に負けないためにも「私は、まだ終わっていません。これからも闘い続けます」と舞台挨拶の中で強く語られていました。
今を生きる私たちは、原発再稼働に大きくシフトを変えた日本政府の動きに危機感を持って、放射能汚染によるリスクを改めて考えなければならないと思います。そのためにも、是非この「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」の自主上映会を企画して、人間・自然の尊厳を見つめ直す良い機会にしていただきたいと切に願います。

映画を多くの人に届けたい

古居 みずえ（映画監督・ジャーナリスト）

映画「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」は、３時間の長編ドキュメンタリーなので劇場上映は長くて１週間しか行えませんでしたが、多くの方々に足を運んでいただくことができました。ご予定が合わずにご覧になれなかった方も多いかと思いますので、今回は劇場上映までの日々と劇場での様子を古居監督が報告いたします。

1 月　試写会

映画が完成したのが 2022 年 12 月末。しかしその頃、私は椎間板ヘルニアになり、手術をするかどうかの混沌とした中にいました。映画は最初から多難の道が待ち受けているようでした。映画のチラシ、パンフの制作、何度も校正があり、やっと 1 月末の完成試写会にこぎつけました。私は 13 日に手術をし、試写会の 2 日前に退院したものの、会場まで行く力はなく、欠席せざるを得ませんでした。監督抜きの試写会？　私は失格ではないかと思いました。でも専修大学の長谷川先生のご厚意で会場を借りることができ、試写会は支援の会の皆さんが行ってくださり、無事に終えることができました。

2 月　宣伝広報に力を注ぐ

それから本番に向けて動き出しました。手術後まだ不安定だった私の体もなんと

か動かすことができるようになり、マスコミの宣伝に回ることになりました。
宣伝担当のリガードの西さんのお力を借りて、婦人公論、女性の広場、マガジン９、ふぇみん、婦人の友、毎日新聞、東京新聞などの取材を受けました。
2 月終わりからは、第 1 作の「飯舘村の母ちゃんたち　土とともに」の自主上映会をアメリカ各地で開いてくれ、現在は制作支援の会のスタッフにも加わってくれている福島が地元のクレアリー寛子さんの助けで、福島の県庁にて記者会見を開くことができました。(写真上) 初めての経験でしたが、福島民報、福島民友、読売新聞、福島テレビなどたくさんのメディアが詰めかけてくださいました。

3 月　いよいよ劇場公開

劇場公開はポレポレ東中野、神戸映画資料館から始まります。劇場公開日が迫る中、なんとかメディア対策もでき、大丈夫と言い聞かせながらも公開前の数日は落ち着きませんでした。支援の会の皆さんとも最後まで対策を練りました。

11 日いよいよ当日です。ポレポレ東中野初日と翌日のゲストの長谷川花子さん、中島信子さんが福島を朝早く出て新幹線で東京に向かっているという知らせを受けました。私も頑張らねばとおそるおそるポレポレ東中野に近づくと結構な人たちが集まり始めてくれていました。到着した長谷川さんたちと会場へ。会場にはたくさんの人がいるようでした。上映後、舞台へ。映画自体が 3 時間の上、10 分の休憩を挟んでいるので、話しは 5～10 分でと言われていて、3 人で壇上へ上がったものの、挨拶程度しか話せませんでした。でも花子さんはしっかりと「私の夫は甲状腺がんで亡くなりました。原発事故はまだ終わっていません」と話しておられました。後で気が付きましたが、この日はチケット完売の満員御礼でした。

信子さん（右）と花子さんの舞台挨拶

2 日目、花子さんと信子さんは舞台挨拶まで時間があり、支援の会の皆さんと新宿御苑へ。記念撮影された写真のお二人はいい顔をしておられました。この日の上映も満員御礼。遅れてきてチケットを買えない人も出ました。平日はどうかと思いましたが、心配をよそに 7 割を超える方々が観に来て下さり、成功を収めました。

大阪から横浜へ

3 月 18 日、ポレポレ東中野での熱気を引きずり、大阪へ。大阪は福島から離れていることもあり、少し温度差を感じました。しかしゲストトークでご一緒した岡崎まゆみさんは福井県美浜町―日本有数の原発銀座で「希望の木」を植え続ける男性と母、そして妻を追ったドキュメンタリー映画「40年 紅どうだん咲く村で」の若手監督で、熱い思いを持った元気な女性でした。お会いした時から質問攻めで、トークの進行も務めて頂きました。翌日の 19 日も舞台挨拶をしましたが、初めて長めのトークの時間があり、会場から質問を受けると、ぎりぎりまでたくさんの手が上がりました。

大阪シアターセブンでのトーク。左が岡崎まゆみ監督

シネマリンの窓口とロビー

3 月 21 日には横浜シネマリンへ向かいました。支援の会をはじめ、カンボジア支援活動を続けるサムレーン・アプサラの方々が入れ代わり立ち代わり受付近くでアンケートを集めたり、パンフレットのサインを呼びかけてくださり、大いに助かりました。その日の観客数は 70 名を超え、大盛況でした。

福島へ

3 月 29 日に福島へ新幹線で移動。そのまま直行で、ふくしま FM の人気番組 Radio Groove に出演。パーソナリティは地元で超人気の武内イタルさん（下写真）でした。ラジオで話すのに慣れない私もイタルさんのたくみな話の運びにのってうまく話すことができました。

フォーラム福島初日の４月１日は、メディアでお知らせしたのも１か月前でしたし、どのくらいの方々が来てくださるか心配でした。でも心配は杞憂に終わり、ポレポレ東中野がそうであったように100 名近い方々が来てくれました。夕方には長谷川花子さん、中島信子さんと 3 人で上映後のアフタートーク。支配人の阿部さんも垂れ幕のような映像を流してくださり協力してくれました。
話の内容は、私が冒頭、映画の制作中に亡くなられた長谷川健一さん、菅野榮子さんのことに触れました。また映画制作の意図については、3 人の母ちゃんたちが頑張って生きておられる姿を通して、原発事故は何だったのか、起こったらどうなるのかを知ってもらいたい、彼女たちの人生の一部を見て頂くことによって、原発事故のことを考えてほしいと話しました。この模様は読売新聞福島版にも掲載されました。
上映期間中には出演者のご家族が駆けつけてくださいました。それは何より嬉しいことでした。そして今まで見たことないような光景は、ご家族同士が対話される様子でした、その時、「この映画は大切な映画だ。できるだけ多くの人たちに観てもらいたい」と話していたようで、この言葉をお聞きして、私は映画を作ってよかったと思いました。

フォーラム福島でのトーク

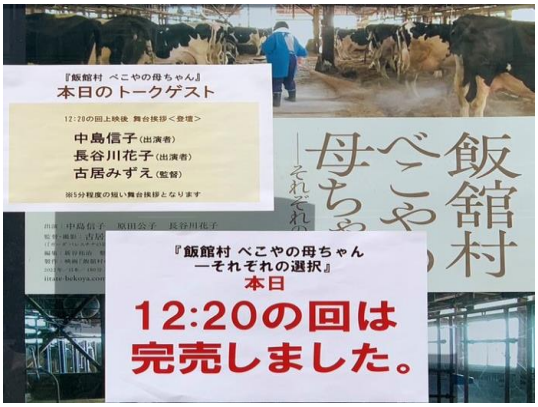
富田賀子さんが描いてくれた映画看板。

映画の上映期間中、話題になったことがありました。映画上映館入り口にある立看板です。写真とも違う、壁画のような映画の看板で不思議な魅力があります。描いたのは福島に住む若いアーティスト、富田賀子（よしこ）さん。今までに 70 枚ぐらい、気に入った映画の絵を描いてきたということです。福島で展覧会も予定されているといいます。映画の出演者の長谷川花子さんもその看板が気に入り、飯舘村で上映するときに使いたいとお願いすると、富田さんは、お譲りしますと二つ返事で答えてくれました。
４月 6 日はフォーラム福島の上映の最終日でした。最後まで多くの皆さんに来ていただきましたが、もう少し長くやりたかったなというのが正直な気持ちでした。この次は自主上映に繋いでいくことが大切なこと、これからが本番です。映画を皆さんのもとに届けるために、少しでもたくさんの地域に広げていくために、これからは力を注いでいきます。どうぞよろしくお願いいたします。

「べこやの母ちゃん」ボランティア記

2023 年 3 月 11 日からポレポレ東中野で始まった「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」の劇場上映中、ボランティアとして活動したスタッフの報告です。

ポレポレ東中野での公開日程が、ちょうど仕事先の 3 月の休業時にあたり、上映 1 週間のうち、多くの日にスタッフとして足を運ぶことができた。
まずは公開スタートのポレポレ東中野に多くの人が足を運んでほしいと思い、チラシまきもしてきたが、実はドキドキ。だが、初日と 2 日目は満席となり、その後の平日も多くの方が足を運んでくださったことは嬉しかったし、来てくださった方には感謝したい。上映終了後は地下の映画館から出てきた方々がパンフレットにサインを求めて列ができ、またアンケートをお願いするとその場で鉛筆を持って書いてくださり、1 階の出口周辺はアンケート記入コーナーともなった。観客のみなさんの反応はとても良く、これも映画の力だろうと感じた。



先日、政府の地震調査研究推進本部の長期評価部会長をつとめた島崎邦彦さんが、書かずにはいられないと執筆した、その名も『3.11 大津波対策を邪魔した男たち』を読んだ。東電など電力会社と政府を含む政官業界による「原子力ムラ」が、津波地震を警告した長期評価をいかにしてゆがめ、無視し、ついに福島原発事故を引き起こしたのか、その経緯を島崎さんが詳細に書いた。原子力ムラは今もまったく変わっていない。この状況で原発推進はありえない。原発事故は何をもたらすのか、『飯舘村　べこやの母ちゃん』は決して声高ではないが、じっくりとそれを私達に伝え、考えさせてくれる作品だと思う。
今後の自主上映会では様々な地域で多くの方に見ていただけるよう、働きかけもしていきたいと考えている。

（石田貴美恵・映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会スタッフ）

菅野榮子さんを偲んで　古居みずえ（映画監督）

2023年2月25日、菅野榮子さんが永眠された。あまりに早く逝かれたのに私は驚きを隠せなかった。私は現在執筆している本の内容を確認するために、何度か榮子さんのお宅を訪れた。昨年の10月初めにお会いしたのが最後になった。11月と12月に榮子さんから2度電話があった。榮子さんは何かを予感していたのか、何度も映画を作ってくれてありがとうと言ってくれた。
その頃、私は長年の不養生が重なり、椎間板ヘルニアを患っていて、身動きもままならなかった。元気だったら榮子さんに会えていたのにと思うと残念でたまらない。
榮子さんは思いのまま感情を出せる人だった。映画ができてからも何度も上映後のトークに登場していただいた。持ち前の明るさと雄弁さでどこでも榮子さんのファンが出来た。榮子さんが避難している仮設住宅に榮子さんの漬けたお漬物が食べたいと言ってきたお客さんもいた。榮子さんのサインが欲しいとやって来た女性もいた。被災者でありながら人を元気づける人だった。
榮子さんはどんなにつらい時も笑いを絶やさない人であり、笑いでつらさや苦しさを吹き飛ばしてきた人だった。そして自分の弱さを見せない人だった。それだけ悲しみは深かったと思う。
榮子さんの無念さは計り知れない。榮子さんはもとのままの故郷で住みたいと思っていただろう。残された者が、その無念の思いを受け止め、それぞれのやり方で、伝え続けていくことが大切だと思う。少なくとも私は映画を通して伝え続けていきたいと思う。
ご冥福をお祈りいたします。

自主上映会を開いてみませんか？

東京電力福島第一原発事故から 12 年。飯舘村に帰村した人、帰村したくても放射線量が高い地域で戻れない人、ほかの土地で牛飼いを続ける決心をした人……3 人の母ちゃんの 3 つのストーリー、それが「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」です。

多くの人の記憶からすっかり忘れ去られようとしている原発事故。被害を受けた村はどう変わり、人々の生活はどう変化したのか？　10 年以上経って、問題は解決したのか？

原発事故がいったん起きると人々の生活がどれほど捻じ曲げられてしまうものなのか、それを是非知ってほしいのです。

今回は少人数規模でも自主上映会が開けるような料金設定にいたしました。それは全国の隅々にまで上映会をすすめていただきたいからです。

★自主上映料金

●参加人数により下記の通りとなります

①参加者10名未満	10, 000円
②参加者10名以上50名未満	30, 000円
③参加者50名以上100名未満	50, 000円
④参加者100名以上	500円×人数

★監督のトーク

上映後に古居みずえ監督のトークをご希望の場合、トーク料金 10,000 円となります。（別途交通費、宿泊費）

※詳しくは下記の映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会にお問合せください。

自主上映会情報

東京・小金井市

6月21日（水）13時～　18時半～ の2回

「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」　シャトー２F 映像祭 week

会　場：小金井アートスポットシャトー２F（小金井市本町6-5-3）

入場料：大人 1,300円　学生1,000円

問合せ：042-316-7236

福島県・飯舘村

7月9日（日）12時半～（開場12時）

「飯舘村　べこやの母ちゃん―それぞれの選択」上映会

会　場：飯舘村交流館「ふれ愛館」（相馬郡飯舘村草野字大師堂17）

入場料：無料

問合せ：0244-42-1374＋fax

通信発行　：　映画「飯舘村の母ちゃん」制作支援の会

〒169-0072　東京都新宿区大久保３-１０-１-８３４　Fax 03-3209-8336

メール　iitateka311@bb-unext01.jp　TEL 090-7408-5126